



金沢女子短期大学 情報処理科

金沢女子短期大学は昭和21年、名勝兼六園の横に金沢女子専門学園として発足、昭和26年に金沢女子短期大学となった。昭和43年に文科と家政科に専攻分離し、昭和50年、全国で初の短大の情報処理科を設置した。キャンパスは昭和56年に金沢市末町に移転し、今日に至っている。定員は現在、文学科200名、家政学科200名、情報処理科150名である。

情報処理科では、現代の社会で求められる情報処理の知識と技能のうち、特に経営活動の場で重要視されている4つの柱、すなわちコンピュータの利用技術、経営管理と簿記会計、数学的な技法、秘書実務の技能を着実な積み上げ学習によって体得することを通じ、知性をみがき、人間性を高めることを目的としている。

情報処理科は現在、情報処理と情報秘書の2つのコースに分れており、前者はコンピュータの利用技術と数学的な技法を、後者は経営管理や簿記会計と秘書実務の技能を重点的に教育している。

コンピュータの利用技術の内容としては、COBOL言語を中心にFORTRAN言語やアセンブラ言語等によるプログラミングの技術を取得させ、一般事務、簿記会計、OR、数値解析等への利用をめざしている。これら

の教育を実現するために、コーディング用紙から直接コンピュータで扱える記憶媒体にするための手書きOCR装置、中型機(FACOM S340-R)から端末装置として使える28台のパーソナル・コンピュータ(F9450II)を設置し、学生が空き時間に自由にこれらの装置を利用できるようにオープン使用方式を採って運営管理を行っている。

昭和59年度からは全学生に情報処理教育を行なうために、新たにパーソナル・コンピュータ(PC9801F)29台を設置し、BASIC言語、ワードプロセッサ、簡易言語等の教育を開始している。そして、一般事務、栄養計算、テキスタイル・デザイン、コンピュータ・グラフィックス等への活用をめざしている。

情報処理科の教職員は〔教授〕木戸睦彦、中島 孝、寺井俊二〔助教授〕吉田寛治、南 俊博、古沢治司、小村 進、大藪多可志〔講師〕山口幸三、山下 浩〔助手〕福田一美、北谷一美〔実習助手〕江尻智恵子、草島かをる、江淵 恵、松井美仁子、井沢直美で、各人の専門は数学、情報処理、電子工学、秘書、会計学など多岐にわたっている。研究テーマも各人各様で、自由な雰囲気できりくんでいる。(南 俊博)

姫路工業大学—大学とORグループ

姫路工業大学は、昭和19年創立の兵庫県立高等工業学校を母体としたわが国で唯一の公立工科系単科大学であり、かつては神戸から広島をあいだに存立する唯一の工学部でもあった。1学年300名という学生数の少なさに加え、PRのうまい教官が少なすぎたためか、その実力と内容に比べて専門家以外にはあまり名が知られていない大学でもある。しかしながら、伝統的な小教精鋭と実力主義の気風は、たとえ就職が内定していても卒業に備える実力がそなわっていないと判断された学生に対しては(本人の将来のためにと)内定企業への了解のもとに、もう1年間勉強させるといった、大学である以上自明といえる厳格さを実行し、結果として多くの有能な人材を

育成し、プロのあいだに「姫路工大で育った人なら安心して」との高い評価を与えてきた。小規模で地味ながらも、大学院修士課程と博士課程を擁する活動的の大学が姫路工大といえよう。

この小規模で地味な大学にも最近変革を求める動きがある。情報化社会にマッチした個性あふれる研究体制づくりとそのPR、兵庫県西部(西播)に建設されようとしている西播テクノポリスの中核研究機関となるための機能と組織の充実、地元産業活性化のためへの研究面と人材面からの(県立大学としての)サービス等の要求がそれである。学内においてもこの動きを冷静に受け止め角戸学長を中心に個性あふれ地域に貢献できる大学へと

われわれ教室の啓蒙はもちろん学外へのPRも盛んに行なわれ、地元産業界や官界との学術情報交換の場であるケミカルサロンやテクノサロンを開催し、ついには県当局を動かして、公立大学でははじめての客員研究部門も含まれている工学基礎研究所の新設も実現した。「自分の研究成果をどのように役に立つかも含めてPRできない教官は去れ」というのが合言葉となってきた。

ここまではずいぶん威勢のいい話であるが、さてORとその関連分野の研究体制と教育ということになると、いささか寂しい。本学には、あまりにも材料系の研究者が多すぎ、ORやその関連分野に関する独立した組織が1つもないということである。現在OR学会員は、電子工学科に所属し、多状態システムの信頼性に関する研究で数多くの論文を出され、IEEEの論文審査員も務めておられる中島助教授、生産システムにおけるサイクリック・スケジューリングや機械構造システムの多目的最適化問題で興味ある論文を出しておられる若手のホープで工作センター所属の由良助手、そして専門共通の応用数

学講座に助教授として所属し、ゲーム理論や情報決定理論の研究をしており、IJGT や JOTA 等で論文審査員を務めたことのある寺岡の、たった3名である。

なんとか会員数の増加をと考えてはいるが、専門の研究組織をもっていない悲しさで、理解者を増やすことが先決である。現在のところ、この3人に学内外で興味ある人を集め、定期的な談話会でも組織できればと考えている。

したがって教育面においても、工学部における基礎知識を与えるという立場でのOR教育しか行なえず、プログラミング入門とその実習、数理統計学、数理計画法が専門共通で、システム工学が電子工学科で、管理工学が機械工学科で講義されている程度であり、すべて選択科目となっているため、受講生もあまり多とはいえない。

情報化社会における個性あふれる大学づくりのためにもOR教育と研究組織づくりの重要性を、OR的に学内にPRしていかなければならない大問題にとりくんでいるのが本学のOR研究者たちの姿である。(寺岡義伸)

名古屋商科大学 情報システム研究所

名古屋商科大学といっても、本学会会員にはあまりなじみのない方が多いであろう。4年前まで、本学会会員は皆無だったのである。しかし、その後、大学トップの情報化教育重視の決断により、大学は大きな変容をとげてきた。

<新教育体制の発足>

3年前のIBM導入を機に、わが国の社会科学系大学としては、きわめて意欲的な情報化教育をスタートさせた。まず、全学生に必修で、コンピュータの基礎知識を与え、プログラミング実習をさせつつ底辺の拡大を計った。ついで、専門科目にも極力コンピュータを利用した演習をとり入れた。そして昨年には、経営情報学科(定員150名)を新設するに至ったのである。新学科は「管理科学」「システム設計」の2専攻から成り、そのねらいは、「経営学を基盤とし、その上にコンピュータ、OR、システムズ・アプローチを道具としての問題解決能力を備えた人材を育成すること」にある。このような本学の新しい教育を支えるべきものが、情報システム研究所である。

<研究所の目的>

本研究所の目的は、「経営のための情報システム」を、

経営学、OR、情報科学などにまたがる学際的立場より研究しようとするものである。このような実践的な分野においては、大学の研究所と言えども、現実離れた理論、あるいは理論のための理論の追求に終始することは望ましくない。そこで、本研究所では、基礎研究から応用研究に至るまでの一貫した研究活動を重視し、広く社会の一般企業とのコミュニケーションをとりながら前進していきたいと思っている。

<研究所の活動>

研究所の正式な発足は本年4月であるが、それ以前からすでに活動ははじめられている。これまでの活動には次のようなものがある。

- MITのKuh教授など国内、国外、学会、企業の著名人を招待しての講演会。
- 米国での最新ORソフトウェアのわが国への紹介、およびこれらソフトを利用しての研究 LINDO(数理計画法, Schrage, シカゴ大学), GNS(シミュレーション, 筆者, イリノイ大学), SLAM(シミュレーション, Pritsker, バデュウ大学), TROLL(計量経済, Kuh, MIT)
- コンピュータ、OR、経営に関する社会人講座の開催。